

令和 4 年度

「運営に関する計画」

最終評価

大阪市立 古市 小学校

令和 5 年 3 月 24 日

1 学校運営の中期目標

現状と課題

令和 3 年度「運営に関する計画」における最終評価から本校の現状と課題は以下のとおりである。
全教職員が平素より子どもに寄り添い、保護者との連携を丁寧に行っている。「いじめアンケート」を毎月行い、子どもの実態把握に努めてきた結果、学校が楽しいと感じており、いじめや不登校は少なく安心・安全な教育活動に取り組むことができている。一方で、自尊感情の向上は十分とは言えず、コロナ禍ではあるが、本校の長年の課題となっている。

学力・体力面においては、小学校経年調査の結果分析から思考・判断・表現の項目では大阪市平均を大きく上回っており、社会科を中心にした授業改善の取り組みの成果が表れている。また、投能力向上に向けた取り組みを授業に組み込むなどの工夫を重ねており、子どもたちが好んで運動に取り組むことができている。しかし、基礎学力の定着に課題がある子どもも多く、学年間の系統を意識した基礎学力向上の取り組みは重要である。

学習者用端末の活用に関しては、全学級で取り組んでいるが、取り組みの頻度は学級間・学年間でばらつきがみられる。

中期目標**【安心・安全な教育の推進】**

- 令和 7 年度の全国学力・学習状況調査の「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を 90%以上にする。(1)
- 毎年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を、毎年、増加させる。(1)
- 令和 7 年度末の校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について、肯定的に答える児童の割合を 90%以上にする。(2)

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 50%以上にする。(4)
- 令和 7 年度小学校学力経年調査の平均正答率 7 割以下の児童を、いずれの学年も令和 3 年度より 2 ポイント減少させる。(4)
- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、最も肯定的に答える児童の割合を 50%以上にする。(4)
- 令和 7 年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を 70%以上にする。(5)

【学びを支える教育環境の充実】

- 令和 7 年度末の校内調査の「日々の授業の中で学習者用端末を活用して、学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を 90%以上にする。(6)
- 1 か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 45 時間を超えず、及び、1 年間の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 360 時間を超えないようにする割合を 70%以上にする。(7)

2 中期目標の達成に向けた年度目標（全市共通目標を含む）

【安心・安全な教育の推進】

全市共通目標（小・中学校）

- 小学校学力経年調査における「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を90%以上にする。（1）
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。（1）
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。（2）

学校園の年度目標

- 令和4年度の小学校学力経年調査の「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を80%以上にする。（1）
- 令和4年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を、前年度より増加させる。（1）
- 令和4年度末の校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、70%以上にする。（2）

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

全市共通目標（小・中学校）

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を50%以上にする。（4）
- 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対大阪市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント向上させる。（4）
- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を90%以上にする。（4）
- 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する割合を70%以上にする。（5）

学校園の年度目標

- 令和4年度の小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を1ポイント増加させる。（4）
- 令和4年度小学校学力経年調査の平均正答率7割以下の児童を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。（4）
- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、最も肯定的に答える児童の割合を50%以上にする。（4）
- 令和4年度の校内調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を60%以上にする。（5）

【学びを支える教育環境の充実】

全市共通目標（小・中学校）

- デジタル教材を活用した朝学習を週 1 回実施する。（6）
- 「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 1（基準 2）を満たす教員の割合を 70%以上にする。（7）

学校園の年度目標

- 令和 4 年度末の校内調査の「日々の学校活動の中で学習者用端末を活用して、学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を 40%以上にする。（6）
- 1 か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 45 時間を超えない割合を各月 70%以上、1 年間の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 360 時間を超えないようにする割合を 35%以上にする。（7）

3 本年度の自己評価結果の総括

いじめアンケートやスクリーニング会議を毎月実施し児童の実態把握・早期対応を行ってきた。対応は、全教職員でだけでなく必要に応じて SC や SSW などの外部支援員、関係諸機関などとも連携を取りながら行った。結果として、いじめの解消率は 98%（前年度全国平均 80.1%）、不登校児童の割合は 1.5%（前年度全国平均 2.6%）となり、一定の成果があったといえる。今後も引き続き、いじめの解消率 100%に向けてより一層の取り組みが必要である。

学力・体力面では、対話を通した学びを重点に置いた授業改善を行い、学級の友達との話し合いを通して考えを広げたり深めたりする実感を持てる児童の割合を 8 割以上にする事ができた。また、誰一人取り残さない学力の向上として、習熟度別授業や放課後学習会などで基礎的・基本的な学習の定着を重点的に行ったことから、小学校学力経年調査において正答率が大阪市平均の 7 割未満の児童の減少に繋がった。体力面では、体育の授業改善として、外部講師を 3 回招聘し運動好きの児童の育成を図った。

教育環境の充実では、デジタルドリル強化週間を設けたり、教員間のアンケートを Teams で行ったことで学校全体の ICT 機器の活用を高めた。組織作りでは、時間外勤務の時数を毎月職員会議の前に全教職員で確認したり、退勤を促す音楽をかけたりするなどの取り組みを 1 年間継続して行い、残業時間を昨年度より大幅に削減することができた。

参照 文部科学省 HP 令和 4 年 10 月 27 日

大阪府立古市小学校 令和 4 年度 運営に関する計画・自己評価 (目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【子どもが安心して成長できる安全な社会（学校園・家庭・地域）の実現】 全市共通目標（小・中学校） ○ 小学校学力経年調査における「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を <u>90%以上</u>にする。（1） ○ 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。（1） ○ 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。（2） 学校園の年度目標 ○ 令和 4 年度の小学校学力経年調査の「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を <u>80%以上</u>にする。（1） ○ 令和 4 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を、前年度より増加させる。（1） ○ 令和 4 年度末の校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、<u>70%以上</u>にする。（2）	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【基本的な方向 1 安心・安全な教育環境の実現】 ・ 校内調査や児童の観察等によって、いじめが認知された場合、学年・管理職・いじめ対策委員会との情報共有を行い、指導の方針や進め方等を確認し、迅速に対応する。 ・ 指導の経過を記録に残し、解消されたと判断されるまで指導を続ける。 ・ また、いじめにつながる児童同士の関係や事象がないかを日常的に把握するため、「いじめアンケート」などの取り組みを行う。 指標 ・ 生活指導連絡会を毎月行い、いじめ指導の進捗状況や児童の様子について情報を共有し、未然防止・早期対応を徹底する。 ・ 「いじめアンケート」を毎月実施し、いじめの解消率を 90%にする。 校内いじめアンケート	B
取組内容②【基本的な方向 1 安心・安全な教育環境の実現】 ・ 新たな不登校児童の割合を減らすため、「スクリーニングシート」を活用する。複数の視点で支援を必要とする児童を早期に把握し、適切な支援を行う。 ・ 欠席状況や児童の観察等から不登校傾向が認められた場合には、スクリーニング会議で取り上げ、さらに生活指導連絡会で報告することで、学校全体で情報を共有し、指導の方針や進め方等を確認して早期対応に努める。 ・ 原因の特定・解消を進める中で保護者との連携を図りつつ、保護者への指導が必要な場合は管理職・教職員・関係機関とも連携を図る。また、不登校につながる児童同士の関係や事象がないかを日常的に把握するため、「いじめアンケート」や聞き取り等、事象に応じた的確な取り組みを行う。	B

指標	・ 全教職員がスクリーニングシートを活用する。 ・ スクリーニング会議を毎月行い、不登校傾向が認められた児童は、学校全体で情報を共有し、全教職員が連携して問題の未然防止・早期発見を徹底する。			
取組内容③【基本的な方向 2 豊かな心の育成】	・ 児童の自尊感情・他尊感情を高めるための手立てとして、自然体験学習や社会体験学習、たてわり班活動、異学年交流や地域との交流を計画し実践する。 ・ 「他者への奉仕（ボランティア活動）」「助け合い・学び合い」「いいところ見つけ」などの活動を各学年で取り組むとともに、芸術鑑賞会や、委員会活動で花を育てることを通して、豊かな心の育成を図る。 ・ 「命を大切に」「いじめをゆるさない」という強い心を育てるため、学年内で課題を明確にし、人権教育の学習を充実させる。道徳科を研究教科とし、研究授業や道徳の研修を計画・実施するとともに、学年内で教材検討や授業交流等を行うなどして、道徳教育の指導方法の充実を図り、豊かな心の育成に取り組む。	B		
指標	・ 令和 4 年度末の校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、<u>70%以上</u>にする。 ・ 隔年で芸術鑑賞と音楽鑑賞を学校行事として設定し、情操教育を行う。 ・ 年 1 2 回の道徳科の研究授業を行い、保護者への理解・啓発を図るために学校だよりやホームページ等で情報発信を行う。 校内アンケート			
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析				
学校園の年度目標				
○ 小学校学力経年調査における「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する割合を 80%以上にする。（1）				
【取り組み】				
毎月、ペア学年でスクリーニング会議や生活指導連絡会、いじめアンケートを行い、全教職員での情報共有を行うことができた。				
【結果】				
	3 年	4 年	5 年	6 年
最も 肯定的	74.2%	82.9%	76.3%	73.5%
肯定的	95.4%	96.3%	94.9%	95.6%
いじめ解消率 90%以上				
→ いじめアンケートでは未達成だがいじめ解消率の結果を合わせて達成とする				
【分析】				
全学年最も肯定的な回答は 80%を達成していないが、肯定的な回答は 90%以上である。児童は自分自身の経験の中でいじわるをした経験やそういった行為を注意できなかった経験の中ではっきりと言い切って回答することに抵抗があると考えられる。しかし、いじめの解消率も 90%を超えていることから、いじめはいけないことであるという認識はあると考える。				
○ 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。（2）				
【取り組み】				
スクリーニング会議を毎月行い全教職員でシートを活用したことで、不登校傾向の児童の情報を早期発見することができた。				
【結果】				
前年度の不登校者数は 0.9%から今年度は 1.5%となり、0.6%増加した。 →未達成				
【分析】				
不登校児童を減らすためにスクリーニング会議や生活指導連絡会を行い学校全体で情報共有、早				

期発見、早期対応を行っている。しかし、不登校児童の個別の事情を分析すると児童個人の特性や社会的な要因、家庭環境、人間関係などが複雑に関わっていることが明らかになり、その具体的な手立てが不登校の改善にまで至っていない。各ケースでは、必要に応じて教育相談や専門機関につなげ丁寧に対応している。必ず効果のある不登校に対する手立てというものは無いのが実情である中で、今後も丁寧に児童一人ひとりと向き合い対応することが求められる。

○ 令和4年度末の校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について、肯定的に答える児童の割合を、70%以上にする。(2)

【取り組み】

指標にあげている取り組み内容は計画通りすべて実施できた。

【結果】

どの学年も目標の70%を大きく上回った。

→ 達成

	第1～3学年	第4～6学年
前期	89.8%	94.2%
後期	91.4%	96.9%

【分析】

今年度は道徳科を研究教科として研究授業や研修会を行うことで、道徳教育の充実を図り、豊かな心の育成に努めることができた。また、「いいところ見つけ」など各学級での日常の取り組みや、たてわり班活動や異学年交流が増えたことも自尊感情や他尊感情を高めることにつながり、目標を達成することができたのではないかと考えられる。

次年度への改善点

○ いじめに関する意識調査に関して

- ・ 最も肯定的な回答の割合を増やすために日ごろからいじめに対する啓発・意識づけが必要である。
- ・ 校内調査に「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」という質問項目を追加し、7月と12月にアンケートを取ることで、児童の意識の変容を見とることができるようにする。

○ 不登校に関して

- ・ 低学年から、不登校の傾向のある児童への対応をスクリーニングなどで考える。また、オンラインなどを活用した取り組みも広げていく必要がある。
- ・ 不登校の児童は自尊感情・自己肯定感が低い傾向にあるので、縦割り活動など異学年の交流を増やすことでこれらを高められるようにする。

○ 豊かな心の育成に関して

- ・ 校内調査の「友達一人一人の違いを大切にしている」の項目について目標を上回っており、次年度は肯定的に答える児童の目標値を70%から80%に目標値を上げる。
- ・ 次年度も引き続き道徳科の研究に重点をおき、豊かな心の育成に努める。また、いじめに関する教材では、いじめについて学級で深く考え、話し合うことで自分事として捉えることができるようにし、「いじめはしてはいけない」という意識を育てる。
- ・ 道徳の別葉を活用し、学校の教育活動全体を通して道徳教育を進める。

大阪市立古市小学校 令和4年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上】 全市共通目標（小・中学校） ○ 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を <u>50%以上</u>にする。（4） ○ 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対大阪市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より <u>1ポイント</u>向上させる。（4） ○ 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を <u>50%以上</u>にする。（4） ○ 小学校学力経年調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する割合を <u>70%以上</u>にする。（5） 学校園の年度目標 ○ 令和4年度の小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を <u>1ポイント</u>増加させる。（4） ○ 令和4年度小学校学力経年調査の平均正答率 <u>7割</u>以下の児童を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より <u>1ポイント</u>減少させる。（4） ○ 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、最も肯定的に答える児童の割合を <u>50%以上</u>にする。（4） ○ 令和4年度の校内調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を <u>60%以上</u>にする。（5）	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【基本的な方向4 誰一人取り残さない学力の向上】 ・ 話し合いの深まりを感じさせるために、各学年や学級で教科を決めて振り返りを行い、又、それに対する評価方法を工夫することで子どもが「わかる」「できる」を実感できるようにする。 ・ 対話による学びを深めるために、ペアやグループ、一人一台端末を活用した学習の機会を設ける。また、そのための研修、学年内での情報共有など行う。 ・ デジタルドリル、単元末テスト、計算ドリルなどを子どもの実態に合わせて組み合わせで使用する。 ・ 誰一人取り残さない学力の向上を達成するために、個人懇談などの短縮授業時を利用して担外などが中心となり、学習の取りこぼしをなくし、学力の向上をはかる。 ・ 経年テストを分析し、7割以下の児童を分析・把握し、それらを基にした習熟度学習に一年間継続して取り組む。 ・ 教員自身も楽しんで授業できるように、英語のゲームなどの実技研修を行う。	B

・ モジュールを活用し、継続的に英語に触れられる機会を設ける。																
指標	・ 校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」の項目を 55%に向上させる。 ・ 令和 4 年度の小学校経年調査における正答率が市の平均の 7 割に満たない児童を学校全体の 5 %未満にする。 ・ 英語の実技研修を年 1 回以上行う。 ・ 校内調査「外国語（英語）の勉強が好き」の項目の「最も肯定的」を 50%にする。 小学校経年調査・校内アンケート															
取組内容②【基本的な方向 5 健やかな体の育成】	・ 体力向上アクションプランや運動カードを活用して体育の授業を実施し、運動が好きになる授業づくりに努める。 ・ 週 1 回以上の外遊び（みんな遊び）を行い楽しみながら運動ができるようにする。 ・ 保健指導や栄養指導により基本的な生活習慣を身に着け児童の健康の保持増進を図る。															
指標	・ 校内調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して最も肯定的に答える児童の割合を <u>60%</u>以上にする。 全国体力・運動能力、運動習慣調査 ・ 教員の実技研修を年に 1 回以上行う。 ・ 年 2 回以上の食育指導を行う。 ・ 学期に 1 回健康週間を行う。															
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析																
学校園の年度目標																
○ 令和 4 年度の小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 1 ポイント増加させる。（4） 【取り組み】 毎時間の最後や各単元の終わりにふりかえりの時間を確保して、児童の考えを深めたり広めたりする活動を定期的に行った。 【結果】 <table><tr><td>学年</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr><tr><td>R3 年度（%）</td><td>48.8</td><td>51.6</td><td>31.1</td><td>52.6</td></tr><tr><td>R4 年度（%）</td><td>54.5</td><td>52.4</td><td>44.1</td><td>29.4</td></tr></table> → 3 学年で達成 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」の項目を 55%に向上させる。 結果→低学年 53 %、高学年 45 % → 未達成 【分析】 前年度と比較すると 4 学年中 3 学年で向上している。 ペア・グループ活動を取り入れる場面を増やし、話し合いをすることで低学年でも自分の意見をもつことにつながった。また、定期的に振り返りを行い交流する機会を設けたことも肯定的な		学年	3	4	5	6	R3 年度（%）	48.8	51.6	31.1	52.6	R4 年度（%）	54.5	52.4	44.1	29.4
学年	3	4	5	6												
R3 年度（%）	48.8	51.6	31.1	52.6												
R4 年度（%）	54.5	52.4	44.1	29.4												

回答な回答の増加につながったと言える。しかし、学年間での差が大きいため、全教職員で取り組めるようにしていく必要がある。アンケートを実施した時期が、学習のまとめの時期と重なり話し合い学習ではなく復習を多く行っていたことも影響していると考えられる。

- 令和４年度小学校学力経年調査の平均正答率 7割以下の児童を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より 1ポイント減少させる。（４）

【取り組み】

年度当初に対象児童の把握と共有を行い、1年間継続して支援を行った。算数科を中心に習熟度別授業にて、対象児童への支援を充実させた。また、短縮期間中の放課後特別授業では、多くの児童が進んで参加していた。さらに、学級担任と習熟度別担当者が連携してデジタルドリル、学習プリント、計算ドリルを活用して基礎・基本の定着を図った。

【結果】

学年	3年	4年	5年	6年
R3年度（％）	7.1	13.6	6.8	3.9
R4年度（％）	4.7	3.7	9.4	4.5

→ 全学年で達成

令和４年度の小学校経年調査における正答率が市の平均の7割に満たない児童を学校全体の5％未満にする。結果→5.3％

→ 未達成

【分析】

短縮期間時の放課後学習により、学期ごとに学習の定着が図れたことに加え、児童の意欲の向上が見られ、結果として児童の学力向上につながったといえる。また、年度当初に経年テストの正答率が大阪市平均の7割未満児童のリストを作成し指導者間で共通の意識をもてるようにしたことで、ICTの活用や習熟度別にすることで学習に対して苦手意識をもつ児童にも配慮でき有効であった。

- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、最も肯定的に答える児童の割合を50％以上にする。（４）

【取り組み】

毎週1回朝の学習でのモジュール学習、週2回の給食時間の放送で外国語の定着を図った。また、指導法の改善として外部講師を招聘し研修を実施した。

【結果】

経年調査における肯定的な回答の割合

学年	3	4	5	6
最も肯定的な回答（％）	54.5	42.9	49.2	35.3
肯定的な回答（％）	79.7	73.2	78.0	60.3

校内調査「外国語（英語）の勉強が好き」の項目の「最も肯定的」を50％にする。

結果→低学年58％、高学年35％

→低学年 達成、高学年 未達成、全市目標 達成

【分析】

大阪市の中期目標では、肯定的な回答が50％以上という指標であったが、前年度の数値を踏まえて最も肯定的な回答を50％以上という目標を設定した。結果として、大阪市の目標を達成できていたが、学校園の目標は達成できなかった。理由としては、高学年において書く活動が増えたり、書いたものへの評価の割合が多くなったりしたことが高学年での数値の低下の要因と考えられる。

- 令和 4 年度の校内調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」の項目について、最も肯定的に答える児童の割合を 60%以上にする。（5）

【取り組み】

教員の実技研修を 2 回行い指導力の向上を図った。また、食に関する指導は各クラス年 2 回ずつ行い、健康習慣を学期に 1 回設定することで基本的な生活習慣を身に付けられるようにした。

【結果】

校内調査の「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して最も肯定的に答える児童の割合を 60%以上にする。 結果 → 低学年 79.2%高学年 62.3%

→ 達成

【分析】

目標を達成することができた。しかし、否定的に答える児童が前期と後期で少し増えている。（低学年 10.6%→10.7%高学年 15.7%から 17.1%）

教員の実技研修や外部講師の方に来ていただく授業、縄跳び週間などは、児童の反応も良く、「スポーツが好き」につながった一因ではないかと考える。

保健指導、食育指導など、継続しながら組織的に行うことで健康に対する意識は高まっている。

次年度への改善点

取組内容①

- ・ 教員が「主体的・対話的で深い学び」の実現ができるように授業作りの研修や自分の考えをもちにくい児童に対して、友達の意見を参考にするよさを実感できるような授業改善が必要である。
- ・ 外国語の取り組みでは、給食中に流す音楽をもっと子どもに馴染みのある曲にしたり、モジュール学習や授業で学習の内容をより系統性のあるものにしたりするなど、計画的に学習を進められるようにする。（第 5 学年までにアルファベットが書けるようにする。）

取り組み内容②【基本的な方向 5 健やかな体の育成】

- ・ 体育の実技研修を継続的に行い、スポーツが苦手な児童にも効果的なアプローチや指導ができるよう指導方法の工夫に努めていく。
- ・ 楽しみながら健康の保持増進ができるよう、運動週間や運動カードの活用を計画的に行う。

大阪市立古市小学校 令和4年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【学びを支える教育環境の充実】 全市共通目標（小・中学校） ○ デジタル教材を活用した朝学習を週1回実施する。（6） ○ 「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準1（基準2）を満たす教員の割合を70%以上にする。（7） 学校園の年度目標 ○ 令和4年度末の校内調査の「日々の学校活動の中で学習者用端末を活用して、学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を40%以上にする。（6） ○ 1か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が45時間を超えない割合を各月70%以上、1年間の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が360時間を超えないようにする割合を35%以上にする。（7）	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【基本的な方向6 教育DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進】 ・ 週一回の朝学習はデジタルドリルを活用する。また、校内でデジタルドリルを授業内で活用したり、宿題や課題にしたりする「強化週間」を設け、積極的にデジタルドリルを活用できる期間を設定する。 ・ 生活科、社会科等の調べ学習を行う際は、インターネットを活用したデジタルコンテンツ等を積極的に利用し、学習者用端末を活用する機会を増やす。 ・ 教員が、学習者用端末の活用機会を増やしていくため、それぞれの教員の情報を共有したり、校内にて情報モラルに関する研修を行ったりすることで、教員のICT活用場面の多様化を図る。 指標 ・ 校内にて、デジタルドリル強化週間を学期に1回以上実施し、各学級や授業にて、デジタルドリルを活用した朝学習などを月に4回以上行う。 ・ 情報モラルに関する教員研修を年に1回行う。	B
取組内容②【基本的な方向7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】 ・ 「教員の時間外勤務時間の状況について」を職員室に掲示する。また勤務情報システムの「時間外勤務実績」を毎月チェックする日を設定し、「教員の時間外勤務時間の状況について」と比較をすることで、時間外勤務に関しての意識を改善していく。 ・ 退勤目標時刻を18時に設定し、職員室に掲示する。また、毎日17時45分に音楽を流し、片付け・退勤の意識付けをする。 ・ 会議を短くするために、伝達事項・連絡はPC上で読むだけにする。 ・ 全体の仕事量減のため、年度末には次年度の行事の精選を行う。 指標 ・ 1か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が	B

30 時間を超えない割合を各月 70%以上にする。 ・ ゆとりの日を毎月 1 回以上設定する。	
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析	
○ 令和 4 年度末の校内調査の「日々の学校活動の中で学習者用端末を活用して、学習している」の項目について、「ほぼ毎日」と答える児童の割合を 40%以上にする。(6) 【取り組みと結果】 ・ デジタルドリル強化週間を学期ごとに 1 回、計 3 回実施することができた。 ・ 強化週間以外でも、朝学や授業内でデジタルドリルを活用する機会が増えた。 ・ 教員に向けた情報モラル研修は、ICT 担当教員による伝達研修と、ICT 教育アシスタントからの資料や情報共有を含めて、実施することができた。 ○ 1 か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 45 時間を超えない割合を各月 70%以上、1 年間の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 360 時間を超えないようにする割合を 35%以上にする。(7) 【取り組み】 ・ ゆとりの日を月 1 回以上設定した。 ・ 1 7 時 4 5 分に音楽を流し、片付け・退勤への意識を高めることができた。 ・ 伝達事項・連絡を PC 上で読むことで時間の短縮に繋がった。 ・ 時間的な見通しをもって放課後の時間の使い方をくふうする教員が増えた。 ・ 働き方改革への意識が高まった。 【結果と分析】 ・ 1 か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 45 時間を超えない割合は各月平均 97%、1 年間の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 360 時間を超えないようにする割合は 77%となり、年度目標を達成することができた。 ・ 指標とした 1 か月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が 30 時間を超えない割合も 73% (該当年度累計) で達成している。	
次年度への改善点	
取り組み① ・ デジタルドリルの活用は朝学だけでなく、授業内でも活用していく必要がある。 ・ 校内調査での、端末活用に関する項目において「ほぼ毎日」の割合を向上させていくために、生活科で端末活用していくなど、低学年の活用機会を増やす検討をしていく必要がある。 ・ 「心の天気」なども端末を活用した学習の一環として捉え、毎日入力していくことで、端末の活用率の上昇を図っていく必要がある。 取り組み② 【連絡方法】 口頭で伝えて共有する「審議事項」と文字で共有する「伝達事項」に分け、「伝達事項」に関しては、全員が SKIP や outlook を確認するように徹底する。そこに掲載した情報は職員朝会などで口頭では伝えず、伝達事項を確認する、という意識を全教職員がもつ必要がある。 【業務内容の精選・分担】 行事の精選・簡略化、会議の精選をし、仕事量を減らしていく取り組みを行う必要がある。 【時間の使い方】 効率的な仕事の進め方について検討が必要である。	